会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

小児科医としての日々と、愛犬ポポとの暮らし

札幌市医師会
篠路こどもクリニック
大屋（おおや）　一博（かずひろ）

札幌市中央区に住んでおります小児科医です。1986年に札幌医科大学小児科に入局し、関連病院での診療や大学での研究を続けてまいりました。専門は小児神経筋疾患で、大学では最後は講師として診療と教育、研究に携わっておりましたが、平成24年４月に退職し、札幌市北区篠路で小児科クリニックを開業いたしました。

開業から十数年が経ち、現在は感染症やアレルギー、予防接種を中心とした一般小児医療に従事しています。神経筋疾患の専門性を活かす場面はほとんどありませんが、それでも日々の診療の中で得られる子どもたちとのふれあいに大きな喜びを感じています。

朝は６時半には家を出て、40分ほどかけて車で通勤しています。冬場の雪道は１時間以上かかることもありますが、北海道の小児科医にとっては“風物詩”のようなものかもしれません。勤務は土曜日が半日、日曜日のみ休診としておりますが、年齢的に１日診療を終えるとかなりの疲労感を覚えるようになりました。とはいえ、元気でいる限りは、地域の子どもたちとご家族の健康を守るために、もう少しのあいだ頑張っていきたいと思っています。

さて、日々の疲れを癒してくれる存在といえば、我が家の愛犬・ポポです。コロナ禍真っ只中の2020年８月、生後２か月で我が家にやってきた、マルチーズとポメラニアンのミックス犬（左：我が家に来た日のポポ）です。名前の響き通り、見た目はぬいぐるみのように愛らしく、初めて会ったときは家族全員が「かわいい！」と大盛り上がりでした。

しかしポポ、見た目に反して性格はなかなかワイルド。よく吠えるうえに、咬む咬む……。気に入らないことがあると、遠慮なくカプッとやられます。私自身、何度か流血するほど咬まれ、病院に通ったこともありました。ちなみに咬まれるのは私だけではなく、家族全員“平等に”です（笑）。専門の動物行動医の先生に診ていただいたこともありましたが、それでもポポの“咬みたい気分”が完全に収まることはありません。それなりの対応もしましたが、結局は「ポポの個性」として、我が家では共存の道を選びました。

それでも、ポポは我が家にとって欠かせない存在です。外出するとき（中：行くなーとばかり吠える）、帰宅したとき、尻尾をふりふりワンワン吠える姿に思わず顔がほころびます。たとえ咬まれても、その無邪気な表情や甘えた仕草には、自然と心が和みます。まさに「ポポなしでは生きていけない」といったところでしょうか。

思い返せば、私の実家では父が動物クリニックを開業しており、私自身も動物と共に育ちました。小学生から高校生まで、北海道犬を飼っておりました。この子はとても穏やかで、咬まれた記憶は一切ありません。中学時代の友人が飼っていたボクサー犬ともよく遊びましたが、こちらも一度も咬まれたことがありませんでした。今になって思うのは、もしあの頃の犬たちがポポのような性格だったら……きっと触れなかったでしょうね（笑）。

少子化の影響は小児科診療の現場にも確実に及んできています。将来的には、診療体制や医療機関の在り方そのものも見直しが必要になるかもしれません。しかし、そのような変化の中にあっても、目の前の子どもたちと真摯に向き合うことに変わりはありません。そして、疲れた心を癒してくれるポポの存在（右：笑顔のポポ）にも、日々感謝しています。

これからも、できるだけ健康で、元気に、そしてちょっと咬まれながら、ポポと共に小児科医としての日々を歩んでいきたいと思っています。

あーあ、ポポと一緒にソファに居たら、ちょっと寝てしまったなあー。

冬の２時間にわたる自動車通勤は大変だし、common diseaseとはいえ地雷が埋まっていることもあるし、患者呼び出しや当直がないとはいえたった一人での休日当番は大変だし、なんと言っても心ないGoogle口コミで心が折れるしで……。十数年たっても開業時の借金返済は続いているから、まだまだ働かないといけないなー。ポポ、ふたりでこれからもずっと頑張ろうね、お父さんのこと応援してねー。